



リスとムササビ

No.10

SCIURID INFORMATION

December, 2001

CONTENTS

国内のフィールドから	北限のムササビ — 青森県三戸郡におけるムササビ観察記録 —	押田 龍夫
リムネ・フィールドサイン図鑑	エゾモモンガの痕跡 — 糞はどんな形でどんなところにみられるのか? —	山口 裕司 柳川 久
海外のリス類	ロシア極東の齧歯類 (2) — キタリス —	V. A. Kostenko (訳/藤巻裕蔵)
活動団体レポート⑥	「酪農学園大学 野生動物生態研究会」	上 山 剛 司 樺 澤 美 奈 子 的 場 洋 平

国内のフィールドから

北限のムササビ — 青森県三戸郡におけるムササビ観察記録 —

押田 龍夫

Tatsuo Oshida

はじめに

ムササビ属は広くアジアに分布しているが、おそらく分布域の北限は日本の青森県であろう。日本に生息するムササビ *Petaurista leucogenys* の生態・行動に関する研究は、その多くが関東・関西地域において実施されたものであり、北方のムササビについての知見はきわめて乏しい。そこで筆者は、1985年5月から1986年11月までの期間、青森県三戸郡名川町の名久井岳（標高615m）の中腹に位置する法光寺の境内、およびその周囲を取り巻くスギ林でムササビの調査を行った（図1）。当時筆者は北里大学獣医畜産学部の自然界部というクラブに所属しており、この調査もクラブ活動の一環として開始したものである。なにぶん、試験やレポートに追われながらの断片的な観察であったため十分なデータを得るには至らなかったが、

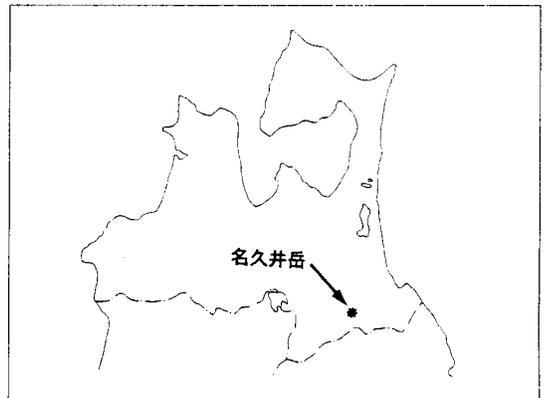


図1 名久井岳の位置：名久井岳は青森県三戸郡名川町の南部に位置し、この周囲一帯は県立公園に指定されている。

筆者が定点観察を続けた一つの巣穴の利用状況、フィールド内で見られた採食行動、およびムササビ個体間の行動について簡単に紹介したい。

巣穴の利用

筆者は境内の社寺林から連続する写真1のスギ林にて発見したスギの樹洞について、肉眼観察により、ムササビがこれを巣として利用する頻度に関する調査を行った(表1)。

まず単独個体の利用についてであるが、1985年9月と12月の中頃および1986年4~5月に成獣個体による利用が観察された。1985年の9月と12月中頃とに見られた個体が同一個体か別個体かは不明であったが、身体のサイズから判断して、少なくとも1986年に見られた個体はこれらとは別の個体であった。次に複数個体での利用であるが、1985年5月に成獣1個体・亜成獣1個体の計2個体、また同年10~11月には亜成獣2個体、さらに同年12月末~1986年1月には成獣2個体の同居行動が観察された。個体識別が困難であったため、前述の単独使用個体がこれらの中に含まれていたか否か、また、1985年5月に観察された同居例の成獣個体が、同年12月末~1986年1月に観察された同居成獣2個体のどちらか一方と同一であったか否かについては残念ながら不明であった。

川道(1984)は巣から顔を出すまでに成長した子供を4~5月と9~10月に見ることができると報告しており、1985年5月に見られた同居はおそらく母子、また同年10~11月に見られた例は親から離れたばかりの兄弟であると考えられる。しかし



写真1 定点観察を行ったスギ林：矢印は巣穴のあるスギの木を示す。

ながら同年12月末~1986年1月にかけての冬期における成獣個体同士の同居はその関係が不明であった。アメリカモモンガ、エゾモモンガ等北半球に分布する滑空性リス類では、冬期における成獣個体同士の同居行動が知られているが(Muul, 1968; Wells, 1985; Stapp et al., 1991; 柳川, 1994)、ムササビでもこのような行動が存在するのか否かについてさらに厳冬期の調査を行う必要があるかもしれない。

ところで、上記以外の期間、ムササビはこの樹洞を利用していなかったのであるが、興味深いことに1986年9~10月に2個体のニホンモモンガ成

表1 ムササビとニホンモモンガによる樹洞の利用状況

Year	Month	Day			
		1	10	20	30
1985	May		○○	○○	
	Jun.			XX	XX
	(Jul.)				
	(Aug.)				
	Sep.		○		X
	Oct.	(X)	X	○	
	Nov.			○○	
	Dec.	X X ○ ○ X			○
	1986	Jan.		○ XX	
(Feb.)					
(Mar.)					
Apr.	X		○○○○	○○	
May			○	○○	
Jun.			X		
(Jul.)					
(Aug.)					
Sep.				X X X ●	
Oct.		● ●	XX	X	
Nov.			X		

記号は、○：ムササビ1個体による利用、◎：ムササビ2個体による利用、●：ニホンモモンガ2個体による利用(ニホンモモンガでは単独個体の利用は見られなかった)、X：利用されなかった場合を各々意味し、また、()内のMonthは観察を行わなかった期間である。

表2 食痕および直接観察によるムササビの食性の季節変化

樹種名	採食部位	採食期間											
		Apr.	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	Jan.		
カエデ	葉			-----									
ブナ	葉			-----									
サクラ	葉芽											-----	
マツ	堅果											-----	
クリ	堅果									-----			
カキ	果実									-----			

獣による利用を確認することができた。これまでにムササビ・ニホンモモンガの同所的分布にかんしては、川道（1992）と柳川ら（1996）による報告があるが、法光寺の境内でも両種の生息が確認されており、今回の樹洞の共通利用例からも明らかのように、両種間に厳密な棲み分けは存在しないようである。しかしながら両種が互いに相手を全く意識していないということは考え難く、何らかの認識・回避行動、さらに競争等が存在するものと思われるが、筆者もフィールドにおける両種の遭遇場面を目撃したことがなく、今後の興味深い研究課題であろう。

採食

フィールド内で食痕等を確認することができたムササビの採食対象樹種とその採食部位および採食期間は表2に示したとおりである。

個体間での行動

1986年1月15日、足元に10cmほど雪が積もっている厳冬期に発情行動と思われる光景を目にすることができた（観察期間を通して遭遇できた発情行動はこれのみである）。1個体の雄が鳴きながら雌を執拗に追いかけてまわしており、これは川道（1984）によって報告されている‘発情騒動’の一環であろう。

川道（1984）は関西のムササビについて、発情騒動は12月と1月に最も多く見られることを述べているが、気温・気象条件の違いにかかわらず、青森県のムササビの発情時期は関西のものとは大差ないのかもしれない。しかしながら今回の観察例はわずか1例のみであるため、青森県における発情騒動のピークがいつ頃であるかについては今後さらに検討する必要があるだろう。

終わりに

筆者が足を運んで調べたかぎりでは、社会構造の把握にまで突っ込んでムササビ調査を行うことが可能なフィールドを青森県で見つけるのは困難である（特定個体の追跡は法光寺境内でも難しい）。しかしながら、北限のムササビの厳冬期における生態は前述のいくつかの問題点をも含めて非常に重要な研究テーマであろう。機会があれば是非このテーマに再度挑んでみたいと考えている次第である。

謝辞

最後に、境内をフィールドとして解放して下さった法光寺住職の橋山武徳氏、そして10年以上前に筆者と共にムササビの調査を行った（今ではすっかりムササビから足を洗ってしまった）北里大学獣医畜産学部自然界部の面々に深く感謝の意を表したい。

引用文献

- 川道武男. 1984. 夜をすべるムササビの社会 (2). 自然, 457: 64-72.
- 川道武男. 1992. ニホンモモンガ・エゾモモンガ. アニマ, 242: 26.
- Muul, I. 1968. Behavioral and physiological influences on the distribution of the flying squirrel *Glaucomys volans*. Miscellaneous Publications of the Museum of the Zoology, Univ. of Michigan, 134: 1-66.
- Stapp, P., P. J. Pekins and W. W. Mautz. 1991. Winter energy expenditure and distribution of southern flying squirrels. Canadian J. Zool., 69: 2548-2555.
- Wells-Gosling, N. 1985. Flying Squirrels: Gliders in the Dark. Smithsonian Institution Press.
- 柳川久. 1994. 小鳥用巣箱を用いたエゾモモンガの野外研究. 森林保護, 241: 20-22.
- 柳川久, 押田龍夫, 谷口明里, 竹田津こるり. 1996. 福井県下で保護されたニホンモモンガに関する知見. 森林野生動物研究会誌, 22: 8-16.

(押田龍夫：台湾東海大学生物学系分子生態学研究室)

エゾモモンガの痕跡 - 糞はどんな形でどんなところにみられるのか？

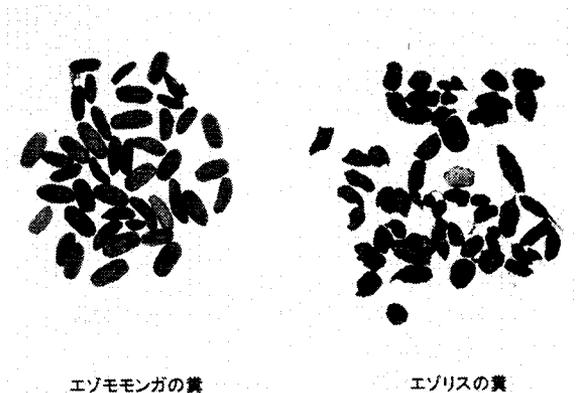
山口 裕司・柳川 久



〈イラスト：住田真樹子〉

糞や食痕などの痕跡を見つけることは、ムササビやモモンガがその場所にいるのかどうかを確かめる有効な手段です。特に、エゾモモンガではいてもなかなか姿を見ることが難しいので、糞を探すことが存在を確認する一番の方法となっています。そこで、今回はエゾモモンガの痕跡、特に糞からわかることと探すときのちょっとしたコツのようなものを紹介したいと思います。

■エゾモモンガの糞ってどんなもの？



エゾモモンガの糞

エゾリスの糞

写真1 エゾモモンガとエゾリスの糞

●どんな形

形は『米粒型』で、大きさはだいたい長さが10mm、直径が2~3mmくらいです。ちなみに同じところにいるエゾリスの糞は形（俵状、いびつな球状など）や大きさがさまざまです（写真1）。

●色はさまざま

色は黄色、茶色、黒などがあり、色は食べたものや糞の新旧によって変わります（写真2）。つまり、糞の色から食べたものをある程度推察することができるというわけです。ちなみに黄色っぽい糞はシラカンバやハンノキなどの花序を、茶色っぽい糞は樹皮を、黒っぽい糞はマツなどの葉っぱを食べたと考えられます。花序を食べた糞が黄色っぽくなるのはおそらく花粉のためだと思われます。

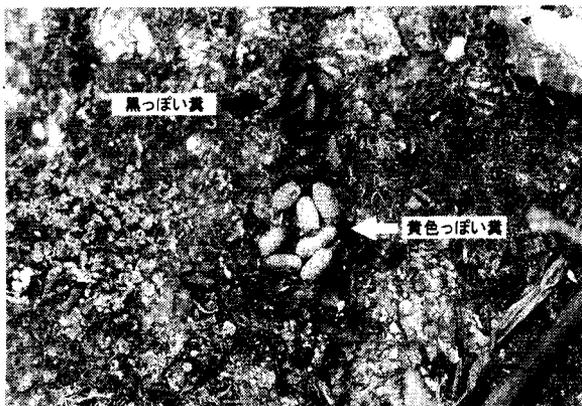


写真2 さまざまな色の糞

■糞はどんなところに？

●探すポイントは決まってる

エゾモモンガの糞は木の根元や枝の叉でよく見つかります（写真3～5）。糞は木の根元付近の樹皮にくっついていたり、地面に落ちていたりします。巣箱がかかっているところでは巣箱の屋根の上でも見られます（写真6）。糞の数は数粒であったり、数十を越えるほど多量にされていたりとさまざまです。



写真3 糞のされていた木の叉の部分

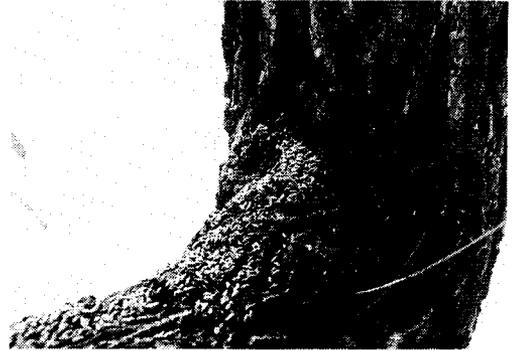


写真4 枝の叉上にされた多量の糞



写真5 木の根元にされた糞

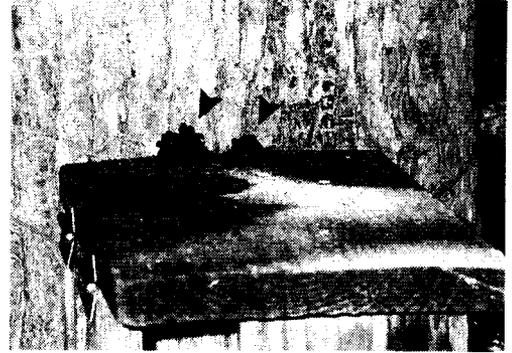


写真6 巣箱上にされた糞

●糞の近くに巣穴がある

糞がされている場所は巣穴のある木自体またはその近くの木が多く、そのようなところには多量の糞がされていることが多いです。これは、エゾモモンガが巣穴を出てすぐに排泄をすること、比較的決まったところで排泄をすることと関係しています。ですので、巣穴となる樹洞のある木やその周辺で多量の糞を見つけたら、その樹洞にはエゾモモンガがいる可能性が高い

です。糞が新しくればなおさらです。逆に多量の糞がされているところを見つけたら、その周辺に樹洞がないか探してみてください。エゾモモンガの使っている巣穴を見つけることができるかもしれません。



写真7 巣穴の下にされた糞

●糞探しのコツ

糞探しは、とにかく木（胸高直径20cm以上の木）の根元や二又の部分等をこまめに見て歩くのが一番です。また、キツツキの古巣などの樹洞を見つけたら、その周辺を念入りに探してみるのもいいでしょう。雪が積もれば、糞のさされている木の根元などが尿で黄色っぽくなっているので、なおさら発見しやすくなります。ですので、糞探しはやはり雪が積もったあとをお勧めします（写真8）！



写真8 雪上に散乱した糞

■食痕～カラマツ

今回は糞をメインにと考えていましたので、食痕についてはあまりふれませんでした。雪が積もると食痕も雪上に散乱しますので比較的見つけやすいですが、雪のない状況下では見つけるのはかなり難しいでしょう。また、雪の上でもこれがモモンガの食痕であると判断するのは結構経験があると思います。

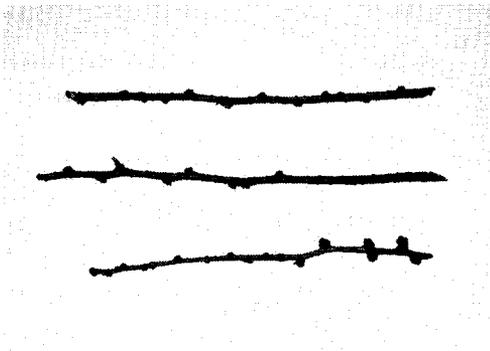


写真9 カラマツ冬芽の食痕（全体）

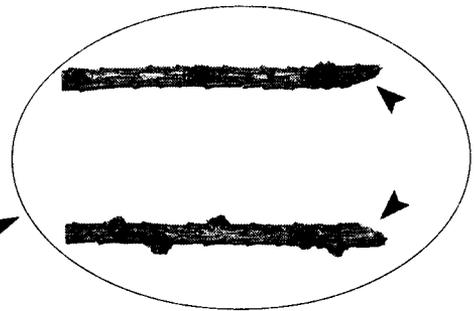


写真10 斜めに噛み切られたあと

ここでは、冬季に帯広でエゾモモンガがよく食べているカラマツの冬芽の食痕を例として紹介したいと思います。カラマツの食痕は、一見、長さ約10cmくらいの小枝が散乱しているように見えます（写真9）。しかし、風などで折れて散らばった小枝とは次の点で識別することができます。①エゾモモンガは枝を噛み切っているため、断面が斜め切りにされている（写真10）。②冬芽の部分が嚙りとられている（写真11）。この点に注意しながら、カラマツの木（胸高直径20cmより大きい木）の周辺に散らばっている小枝をチェックしてみてください。きっと食痕を見つけれられると思います。

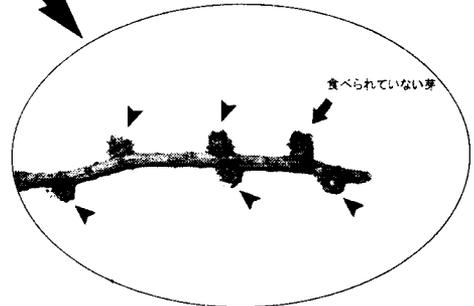


写真11 嚙りとられた冬芽

■おわりに

エゾモモンガの糞や食痕については、(1)と(2)に写真入りで解説がされていますので、興味のある方はこれらの本をご覧になることをお勧めします。しかし、やはり実際にフィールドにいった実物を見るのが一番だと思いますので、北海道に来られたときは、是非林に入って、エゾモモンガの糞・食痕探しをしてみてください！！

■参考文献

- (1) エコ・ネットワーク（編）、1994。『フィールド・ウォッチングガイド』北海道 野生動物の痕跡を読む、北海道新聞社、札幌、219pp.
- (2) 門崎允昭、1996。Dr.が特の実用鑑定 野生動物痕跡学事典、北海道出版企画センター、札幌、303pp.
- (3) 門崎允昭、2001。エゾモモンガ *Pteromys volans* の痕跡、森林野生動物研究会誌、(27)：27-33.

(山口裕司：アークコーポレーション株式会社、柳川 久：帯広畜産大学野生動物管理学研究室)



ロシア極東の齧歯類(2) —キタリス—

V. A. Kostenko (訳/藤巻 裕蔵)



リス科 Sciuridae Fischer, 1814

キタリス *Sciurus (Sciurus) vulgaris* Linnaeus, 1758

分布域

イギリスとアイルランドから西はギリシャやユーゴスラビアまで、東はアナディール川流域、朝鮮半島、日本列島、またモンゴルや中国北部までのユーラシアの森林帯と森林ステップ帯に分布する。

この地域で、キタリスはプリモージェ南部の針広混交林から高木林北限(コリマ川とアナディール川の流域)まで生息する。サハリン、ポリョイ・シャンタル島にも生息し、今世紀初頭にはカムチャツカに入った(図1)。

分類と亜種の分布域

分布域の極東地域では次の3亜種がいる。*S. v. jacutensis* Ognev, 1929、コリマ川沿いから東はアナディール川沿い、コリヤーク高地、カムチャツカまで、南はオホーツク海沿岸までの北部地域、*S. v. rupestris* Thomas, 1907、オホーツク海のシャンタル諸島沿岸、シャンタル諸島、サハリン、アムール州、ハバロフスク地方(南はアムール川左岸まで)、*S. v. mantchuricus* Thomas, 1909、アムール川右岸のプリモージェ南部まで。

分布と生態分布

極東でこの種の好適な分布域は、食物条件や営巣条件がよいシホテ・アリンのチョウセンゴヨウ-広葉樹林に一致する(1,000ha当たり400頭まで)。密度が中程度の地域は、川沿いの落葉広葉樹林で、おもにさまざまな高木、灌木、つる植物の実がなり、またキノコがでる夏と早秋に観察される(1,000ha当たり300頭)。その後9月までにさ

まぎまのタイプのチョウセンゴヨウ林やナラ壮齢林に集中する(チョウセンゴヨウの実やナラのドングリがある場合)。このような環境では、よく食物を食べつくすまでおり、その後大部分の個体はモミ-トウヒ林に移動する。これらの森林における生息数は、1,000ha当たり20頭に達する(Kostenko et al. 1990)。主要な食物(チョウセンゴヨウの球果、ナラのドングリ)が不作だと、食物を求めてかなりの移動が観察され、雪が積もるまで続く。移動のとき、一時的に山腹のナラ幼齢林、川沿いのカンバ林やヤマナラシ林といった広い範囲のあらゆるタイプの森林で見られる。この種の分布北限は高木林限界に一致し、垂直分布でも高木林に限られている。

ハイマツの実が豊作の年には、実の熟する時期に山地のハイマツ分布上限まで行くが、これらの場所で生息数はあまり多くなく、食物を完全に食べ尽くすと低地の森林に下りる。このように、非常に条件の悪い二次林や高山のハイマツ帯には生息しない。

プリアムーリエでおもな生息環境は、チョウセンゴヨウ-広葉樹林やチョウセンゴヨウ-トウヒ林である。生息数はナラ-広葉樹林や広葉樹河畔林では少なく、モミ-トウヒ林ではさらに少ない。カラマツ林では非常に少なく(1,000ha当たり15頭以下)、カラマツ林に生息するようになるのは、カラマツ林が優勢となるアムゲン川から北だけである。しかし、この地域でも生息数は非常に少ない。ゼヤ自然保護区のカラマツ林でも普通に見られるが多くはなく、年によってはトウヒ林で1,000ha当たり15頭になるだけである。

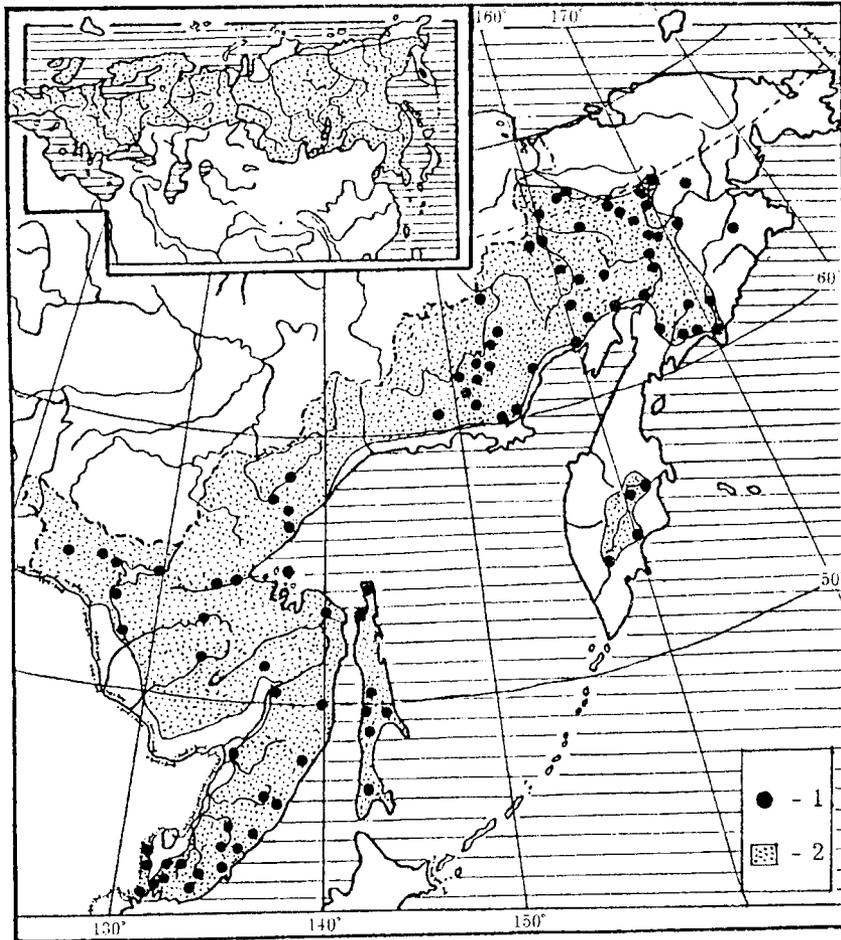


図1 ロシア極東と旧北区（上部挿入図）におけるキタリスの分布 1=発見場所、2=分布域

サハリンやポリショイ・シャンタル島ではどこにでも生息しており、とくに常緑針葉樹林や混交林で見られ、カラマツ林では非常に少ない。

オホーツク海沿岸ではおもにトウヒ-モミ林に生息するが、大陸内陸部（マヤ川沿い）ではうっ閉したカラマツ林に生息する。これらの場所における生息数は、極東南部に比べて少ない。

さらに北ではカラマツ林帯全域（カラマツ林北限まで）で見られるが、おもに針広混交河畔林にいます。同じような分布状況は、分布域最北限まで見られるが、そこで非常に重要なのはハイマツの存在である。秋・冬、とくに移動時期にはいつもハイマツ林にいる。

コリヤーク高地やカムチャツカには今世紀の初頭には生息するようになった。パラポル谷にも分布し、コリヤーク高地、アナディール川沿いのドロノキ-ヤナギ河畔林に生息し、カムチャツカ南部まで入っていて、ダケカンバ林に生息し、ハイマツの豊作の年にはここからかなり離れたハイマツ林にも行くようになるが、とくに生息数が多いのはカムチャツカ半島中央部の針葉樹林である。

D'yakov (1986) によると1950年代、クロテン資源の回復後に、キタリスの生息数は、狩猟可能な生息密度であった半島中央部の針葉樹林を除きカムチャツカ全域で減少した。その他の地域では、まれに見られるだけである。

食性

年間をとおして主要な食物はチョウセンゴヨウ、ハイマツ、トウヒ、マツ、モミ、カラマツといった針葉樹の種子、またキノコや様々の漿果類である。分布域南部では、これらの食物のほか、重要なのはナラのトングリ、ハシバミやクルミの実である。リスはこれらの食物を深さ1.5mの積雪の下からでもさがし出すことができる。分布域南部で樹洞に大量の種子を貯食することはほとんどない。さらに北の地域では冬に向けての種子やキノコの貯食は普通のことである。キノコは針葉樹の枝先端の二叉部で乾燥している。次いで重要な食物は、ミヤマザクラやウワミズザクラの実、広葉樹、まれに針葉樹の芽や芽条、草本類の葉や花、また動物物質（おもに昆虫）である。

繁殖

発情の時期は、気象条件、冬の食物の存在、その得やすさによって異なる。条件のよい年に分布域南部では、発情は1月に始まるが、条件の悪い年には2月、さらに3月のこともあり、北部では2月末から4月初めまでである。越冬雌は1年に1~2腹を産み、産子数は北部では4~6頭（まれに12頭まで）、南部では2~7頭（まれに10頭まで）である。幼体は普通翌年に繁殖を始める。プリモーリエでは年により秋のチョウセンゴヨウの実やナラのドングリが豊作だと、妊娠中や授乳中の雌が12月初めにも見られるが、これは多くの早熟の雌が発情して2回目繁殖が長引いたか、または3回目の繁殖をしたためである。

生活様式、隠れ場

日中、おもに朝と夕方に活動する。ほかの時間帯、また悪天候（強風、暑さ、雨、厳寒）のときには、樹洞、まれにおもに針葉樹樹冠部の中程に枝、コケ、地衣類で造られた「ガイナ」といわれる球型巣にいる。冬には活動が午前中に限られる。

地上だけではなく、樹冠から樹冠へと枝上もよ

く移動する。少しでも危険なときにはすぐに逃げられるよう、よく樹木近くの地上で採餌する。

移動

季節移動は晩夏と秋に見られるだけで、おもに幼体の分散によるものである。食物条件により年によって生息数が変動したり、食物を求めての移動をする。長年の観察によると、生息数はチョウセンゴヨウの豊作年の翌年には明らかに増加し、不作の翌年には急減する。年によっては沿海地方全域やハバロフスク地方の一部で不作となり、またある年には斜面の上部で結実し、別の年には山麓部や川沿いで結実するというように年によりチョウセンゴヨウが局所的に結実することがある。そのため、地域によって生息数が異なる。しかし、全体に高密度と低密度は、数百万haという広大な地域で起こることである。

この数十年で南部の広範囲にわたってチョウセンゴヨウの伐採により、上述の規則性がくずれ、全体に生息密度が低くなっている（Kulikov 1980）。生息数の減少は、分布域北部でも見られている。

（訳/藤巻 裕蔵：帯広畜産大学野生動物管理理学研究室）

酪農学園大学 野生動物生態研究会

▶ 連絡先：〒069-0831 北海道江別市野幌若葉町92-1 夢喰庵 TEL&FAX 011-385-1980

酪農学園大学の野生動物生態研究会は、1977年の発足以来、道立自然公園野幌森林公園を主なフィールドとして活動しています。これまでの主な活動としては20年以上継続して行われている鳥類センサスと植生調査があります。近年は移入種として様々な問題を引き起こしているアライグマの食性および寄生虫などに関する調査も行っています。他にも、冬虫夏草や水生生物（水草・魚類など）、コウモリ……等々、部員各々がテーマを持って調査に望んでいます。その成果は、年間活動報告書「夢喰」にまとめられます。また、パネル展などの開催により、多くの人に調査結果の公表や野幌森林公園の現状を紹介しています。しかし、エゾリスについては今まで目撃観察記録があったのみで、体系立てた調査は行われてきませ

んでしたが、今年度に入り哺乳類班有志が初めてエゾリスの調査に乗り出しました。



写真1 1999年5月、野幌森林公園・大沢池にて（撮影：吉沼利晃）



写真2 2001年8月、野幌森林公園に隣接する酪農学園大学にて。身近な動物であることがうかがえる。(撮影：吉沼利晃)



写真3 2001年10月、調査のため設置されたエサ台を訪れたエゾリス。野幌森林公園・瑞穂調査区にて(撮影：上山剛司)

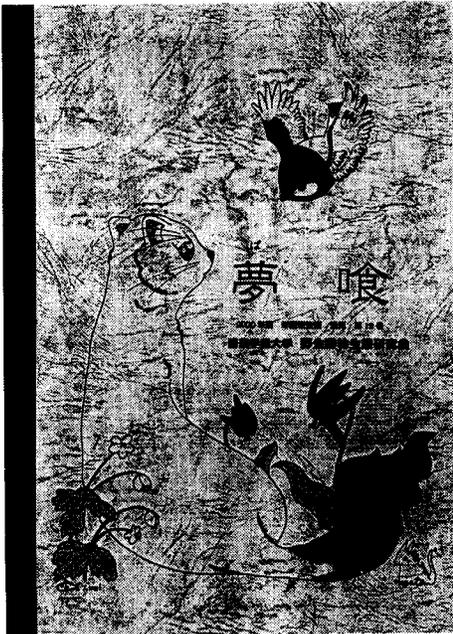
私達がフィールドとする野幌森林公園は、札幌市の中心部から東方10～15kmに位置し、江別市域を中心に、札幌市、北広島市の3市にまたがる野幌丘陵に広がっています。その大きさは2,051haと大きく、都市近郊の平地林としては世界有数の規模の広さを誇ります。ウィーンの森・フォンテンブロー森林に並ぶ世界でも代表的な都市近郊林とも表現され、石狩低地帯の生物相を残す貴重な森林となっています。

この野幌森林公園で過去に行われたエゾリスの調査としては、1996年に T.H.Lee 氏らにより実施された「野幌森林公園の夏期におけるエゾリスの生息分布調査」と、2001年夏まで片岡友美氏(北海道大学大学院 農学研究科生物生態学体系学講座動物生態学研究室)により実施されていた「エゾリスの越冬戦略」などがあります。

私達はこの2つの調査結果を参考にして、「野幌森林公園のエゾリスにおける餌サイズと森林環境による貯食様式」と題して調査を実施しています。本研究では、エゾリスの主要食物である、オニグルミとカシグルミを用いて、貯食行動が森林環境や餌サイズに関係するかどうかを、針葉樹優占地域と落葉樹優占地域(針広混交林)などの異なる森林環境の実験区を設定し、貯食物の餌サイズを人為的に操作することによって実証することを目的としています。これまでに実験区の設定を終え、2001年9月よりクルミの供試実験および双眼鏡を用いた定点観察によるデータの収集(採餌・貯食する個体の確認、行動パターンと時間の記録など)を行っています。

一般の人にとってエゾリスは観察されやすい野生動物ですが、彼等の本当の姿はあまり知られてはいません。調査を通して私達も樹上性の動物にもかかわらず、貯食行動を行う際に地上移動が多く、貯食した場所は何も印がなければとうてい分からないように隠されていることに驚きました。調査は始まったばかりですが、野幌森林公園で最も身近な哺乳類であるエゾリスの生態を明らかにし、その魅力をより多くの人へ伝えていきたいと思っています。

(上山剛司・樺澤美奈子・的場洋平：
酪農学園大学野生動物生態研究会)



年間活動報告書「夢喰」第19号

対象は様々でもフィールドを共にする部員各々の活動成果がまとめられている。いわばサークル(部員)の活動を映し出す鏡のような存在でもある。

「リスとムササビ」総目次 (No.1~No.10)

サブタイトルごとに分けてみました。●印の記事はサブタイトルあるいは著者名を改正させていただきます。なおバックナンバーは一冊300円で扱っています。事務局までご連絡下さい。

特集

日本のリス類の過去・現在

- ・・・そして、未来 (第1回集會報告)
- 集會報告 押田龍夫 3号-1
- 日本産リス類の起源 押田龍夫 3号-2
- 観察者を惑わすムササビの羣丸 川道武男 3号-4
- エゾリスの交通事故とその対策一帯広市における取組み 柳川 久 3号-7
- 話し合いの中から 重昆達也 3号-9

観察会〜リス・ムササビの観察における研究・教育の問題点〜 (第2回集會報告と関連記事)

- 集會報告 繁田真由美 5号-1
- 単なる観察会で終わらせないために 川道武男 5号-2
- ムササビ観察会と問題点 岡崎弘幸 5号-4
- 山のふるさと村におけるリス・ウォッチングの試み 小林 毅 5号-6
- ムササビ観察会の試み 青木雄司 5号-9
- アンケートを実施しました!! 岡崎弘幸 5号-10
- 環境アセスメントと触れ合い活動 安藤元一 5号-11

台湾特集

- 「日台合同リス・ムササビ類学術交流会議」を終えて 押田龍夫 6号-1
- 台湾ムササビ観察体験記 重昆達也 6号-4
- 台湾ムササビ観察ツアーに参加して 真鍋紀子 6号-8

リス科動物の帰化問題について考える (第3回集會報告と関連記事)

- 集會報告 柳川 久 7号-1
- ペットとして日本に持ち込まれている外国産リス類 柳川 久 7号-2
- 輸入されるリス類と感染症 川道美枝子 7号-4
- 狭山丘陵で発見されたキタリスについて 繁田真由美・押田龍夫・岡崎弘幸 7号-6
- イギリスのリス事情と帰化動物への想い 佐藤万里 7号-10

ニホンリスの生態とムササビの生息調査 (第4回集會報告)

- 集會報告 川道美枝子 9号-1
- 長野県の2地域におけるニホンリスの生態 西垣正男 9号-2
- ムササビの生息調査と問題点 岡崎弘幸 9号-5

観察講座

川道武男

ムササビ観察マナーとテクニック (1) 1号-3、ムササビ観察マナーとテクニック (2) 2号-3

シマリスのすべて

川道美枝子

(1) シマリスの尾 1号-6、(2) シマリスの食糧戦略 2号-5、(3) シマリスの共有財産 4号-8

リス・ムササビの寄生虫

横畑泰志

(1) シファリスタ・カメガイについて 1号-10、(2) エキノコックスの中間宿主としてのリス類 4号-14、(3) 寄生虫を同定しようー富山のモモンガの毛様線虫の場合。 1 6号-10

海外のリス類

ロシア極東の齧歯類 V.A.Kostenko (訳/藤巻裕蔵)
(1) タイリクモモンガ 9号-16、(2) キタリス 10号-7

国内のフィールドから

モモンガ類の産仔数 柳川 久 1号-5
神奈川県・丹沢山地のモモンガ・ムササビ・リス 山口喜盛 2号-8
三重県熊野市で保護されたニホンモモンガの幼獣 佐野 明 3号-10
コウモリ用巣箱を利用したニホンヤマネ 山口喜盛 6号-12
エゾモモンガは数が数えられるか? 柳川 久 8号-10
東京都のムササビ観察 浅利裕伸 9号-8
北限のムササビー青森県三戸郡におけるムササビ観察記録ー 押田龍夫 10号-1

海外のフィールドから

台湾のムササビ 押田龍夫 1号-7
台湾の先住民族とムササビ 押田龍夫 8号-5

研究紹介 (国内&海外)

リス類の咬筋と比較機能形態学 佐藤利彦 4号-10
台湾産リス類の生態と保全 郭 寶章 8号-1
移入種タイワンリスの寄生虫調査ーご協力依頼をかねてー 浅川満彦 9号-18

事例報告

エゾリスのエコブリッジ利用 柳川 久 4号-7
高知のムササビ〜5年間の保護記録よりー 吉澤未来 8号-8

修論&卒論紹介

※森林の分断化によるニホンリス生息域の減少 片岡友美 4号-1
狭山丘陵におけるリス類の分布について 中澤美和 9号-12
オーバブリッジを利用するシマリス 岡部佳容・野呂美紗子・柳川 久 9号-15

リムネ・フィールドサイン図鑑

※食痕編ーアカマツの球果を食べたニホンリスとムササビ 繁田真由美 6号-14
ムササビの食痕アレコレ 繁田真由美・岡崎弘幸 9号-10
エゾモモンガの痕跡ー糞はどんな形でどんなどころにみられるのか? 山口裕司・柳川 久 10号-4

活動団体レポート

- ①「ムササビ会」 重昆達也 1号-10
- ②「エゾリスの会」 伊藤育子 3号-11
- ③「富山大学ムササビ研究グループ」 野澤佳広 5号-13
- ④「守山リス研究会」 北山克己 6号-15
- ⑤「九州大学生物研究部小動物班」 篠原良太 7号-18
- ⑥「酪農学園大学野生動物生態研究会」 上山剛司・樺澤美奈子・的場洋平 10号-9

その他の記事

リス・ムササビネットワークの発足に寄せて
ムササビ観察の25年 安藤元一 1号-2
最新ペット事情
ペットとしてのリスについてー輸入ムギワラリスより摘出された散弾からー 押田龍夫 2号-1

企業の取り組み
ニホンリスの回廊の創出を目指して 小松裕幸・小田信治 4号-5

その他

- ◆Data Sheet 今関真由美 1号-12
- ◆博物館だより (大岡山国博物館) 2号-11
- ◆白目リス 編集部 4号-15
- ◆台湾に生息するリス科動物 Part 1&2 押田龍夫&編集部 6号-3,9
- ◆トピックス (新聞記事) 6号,7号-17
- ◆「リスとムササビ」総目次 10号-11
- ◆お知らせ 1号-11,2号-12,3号-12,4号-15,5号-14,6号-16,7号-20,8号-11,9号-19,10号-12

お知らせ

INFORMATION

掲示板

Bulletin Board

新刊案内 1

「移入・外来・侵入種— 生物多様性を脅かすもの」

【編者】川道美枝子・岩槻邦男・
堂本暁子

【定価】本体2,800円＋税

【体裁】四六判、本文336頁＋口絵4頁

【発行】築地書館（TEL：03-3542-
3731 FAX：03-3541-5799）

釣業界を巻きこんだブラックバス問題は誰もが知る場所ですが、同じことが植物・両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類などあらゆる生き物の世界で起きています。本書では第一線で活躍する内外の研究者たちが、国際的な取り組みをはじめ最新の研究をもとに移入種・外来種の何が問題なのか今何が起きているのかを紹介・解説しています。

新刊案内 2

ニッポン里山探検隊シリーズ・2

「コウモリ観察ブック」

【著者】熊谷さとし・三笠暁子・
大沢夕志・大沢啓子

【定価】本体2700円＋税

【体裁】B6 変型判、240頁 オールカラー

【発行】(株)人類文化社

【発売】(株)桜桃書房 (TEL：03-
3792-2411 FAX：03-3793-7048)

本書では日本に生息するコウモリ全36種と外国の特徴的なコウモリ28種を紹介しながら、かれらのもつ超能力や不思議な生態を写真・イラストとともに解説していきます。オオコウモリ、小型コウモリそれぞれの観察法も充実。コウモリとの共存のあり方も提示しています。

ニホンリスの文献紹介

日本哺乳類学会から発行されている「哺乳類科学」の最新号に以下のタイトルの総説が掲載されました。

矢竹一穂. 2001. ニホンリスの保全ガイドラインづくりに向けて. I. ニホンリスの保全事例. 哺乳類科学, 41: 125-136.

田村典子. 2001. ニホンリスの保全ガイドラインづくりに向けて. II. 海外におけるリス類の保全. 哺乳類科学, 41: 137-148.

矢竹一穂・田村典子. 2001. ニホンリスの保全ガイドラインづくりに向けて. III. ニホンリスの保全に関わる生態. 哺乳類科学, 41: 149-157.

事務局から

■お詫びとお願ひ

前号（「リスとムササビ」No.9）の「ロシア極東の齧歯類（1）—タイリクモモンガ—」におきまして、冒頭の挿絵（下記）が抜けて印刷されてしまいました。原稿をお寄せいただいた藤巻裕蔵先生に深くお詫び申し上げますとともに、会員の皆様にもお知らせし訂正お詫びさせていただきます。つきましては、今号の会報送付時に「タイリクモモンガシール」を同封致しましたのでお手数ですが、前号に貼り付けていただきますようお願い申し上げます。

編集担当 繁田真由美



タイリクモモンガ

■原稿、イラスト、表紙写真募集！

リス類に関する投稿原稿を募集しています。書式・内容等は自由です。イラスト・表紙写真も募集中。お気軽に事務局までお寄せ下さい。次号の原稿等締切は2002年4月20日です。

本号の表紙写真：カラマツの冬芽を食べるエゾモモンガ 撮影&文：柳川 久

撮影場所は帯広畜産大学構内、撮影日時は1989年3月9日15時過ぎ。この日は私にとって忘れられない、エゾモモンガの交尾を野外で観察した初めての日です。この個体は、この写真を撮ってから約1時間後、16時23分に交尾しました。

交尾の場所は、大学生協横の車道に沿った並木の幹で、下校途中の学生や職員が何人も行き来していましたが、モモンガ達ははっぴょうに気に留めていないようで、人の目の前をビュンビュン飛び交っていました。

リスとムササビ No.10

SCIURID INFORMATION December, 2001

- 発行 リス・ムササビネットワーク
- 編集委員 安藤 元一 押田 龍夫 川道 武男
川道 美枝子 柳川 久
- シンボルマーク 大高 利之
- 編集 繁田 真由美 繁田 祐輔
- 発送 繁田 真由美

■郵便振替口座番号 00240-5-29219

■加入者名 リス・ムササビネットワーク

【編集後記】◆今号も年越ししてしまいました。早めに原稿をお寄せ下さった方お詫び申し上げます。◆お知らせのコーナーで紹介したニホンリスの文献には「リスとムササビ」が何度も引用されていてとても嬉しくまた励みに思いました。◆当会は発足後5年が経ち、今回10号の区切りとして総目次掲載しました。ご覧下さいませ。情報誌の発行と年1回の集会という地味な活動ですが、今後もご支援のほどお願い申し上げます。◆次号は「リスと開発、道路とリス」特集です。

□リス・ムササビネットワーク事務局 □

〒227-0066 横浜市青葉区あかね台1-21-14-B 繁田真由美
TEL&FAX 045-989-1004 E-mail BXQ01747@nifty.ne.jp

©2001 Japan Network of Sciurid Researchers